

Michael Scott, *Space and Society in the Greek and Roman Worlds*

Cambridge University Press, Cambridge, 2013, Pp. xvii, 212.

増永理考 杉本陽奈子 山下孝輔 宮坂真依子 酒嶋恭平

20 世紀から 21 世紀にかけて、人々の空間認識には、かつてないほど大きな変化が生じた。交通機関の発達により、地球上どこでも比較的容易に訪れることができるようになり、たとえ遠隔地であっても、その場所との心理的距離はいつそう縮まった。とりわけ今世紀に入って、インターネットが普及したことにより、「バーチャル空間」という新たな空間が創りだされたことは、人類史上、大きな意義をもつとみてよい。

空間認識に関する変化は、学問領域でもみられた。特に、1974 年に出版された H・ルフェーヴルによる『空間の生産』という書物を一つの契機として、「空間論的転回」と称される、学問的潮流の大きな変化が起った¹⁾。ルフェーヴルは、従来のように、単なる「もの」として、つまり、社会から孤立したものとして空間を捉えることを否定する。空間は、絶えず社会と影響を及ぼしあっているため、そのような関係が実体化したものとして空間は認識されるべきである、と彼は考える。このような認識に立つとき、空間は静的な「もの」ではなく、社会のダイナミクスによって「生産」され、絶えず社会と相互的に作用しあうものとして理解されることとなる。このように、空間を動的なものとして認識することが、ルフェーヴルによる主張の最大の特徴である。

以上のようなルフェーヴルに代表される新しい空間論は、元来、地理学や建築学など、実際に空間を研究対象としてきた学問分野で主唱されたが、近年では学際的なものとして、社会学や歴史学、さらには文学にまで応用されるようになっている。

西洋古代史においても「空間論的転回」の影響は及んでいる²⁾。その影響の一つが本書である。著者の M・スコットは、ケンブリッジ大学出身で、現在、ウォーリック大学の助教を務める新進気鋭の研究者である³⁾。彼はデルフォイを主な研究対象とする一方で⁴⁾、学際的な研究に長け、一般向けの講演やテレビ出演など様々なアウトリーチ活動を精力的に行っている。その学際的な志向ゆえに、本書が誕生したことは明らかである。本書の構成は以下の通りである。

Introduction

1. Inheriting and articulating a community: the agora at Cyrene

2. Networks of polytheism: spaces for the gods at Delos
3. Spaces of alienation: street-lining Roman cemeteries
4. A spatial approach to relationships between colony and metropolis: Syracuse and Corinth
5. The place of Greece in the *oikoumene* of Strabo's *Geography*
- Conclusion: space and society in the Greek and Roman worlds

以下、各章の内容を紹介し、論評を加えていくが、あらかじめ執筆の分担を記しておく。序論、および第1章を増永理考（古代ローマ史専攻）、第2章を杉本陽奈子（古代ギリシア史専攻）、第3章を山下孝輔（古代ローマ史専攻）、第4章を宮坂真依子（西洋古典文学専攻）、第5章、および結論を酒嶋恭平（古代ギリシア史専攻）がそれぞれ担当し、総評に関しては、執筆者全員の意見を踏まえ、酒嶋がとりまとめた。

Introduction

イントロダクションでは、本書の目的、および先行研究が示され、本書の方向性が定められる。近年、上述の新たな空間理解に基づいて、本書と同シリーズの研究書やヨーロッパ規模での研究プロジェクトが空間の問題に取り組んでいる。そのような中、再定義された空間認識を古代史研究の様々な領域に適用させ、空間の解明に関する研究の可能性を提示することが本書の目的となっている。続いて、先行研究が整理されるが、考古学的研究から文学における空間研究に至るまで、実に幅広い分野がカバーされており、著者の学際的志向を垣間見ることができるとともに、空間研究に馴染みのない人にとっては、非常に有益な情報となっている。先行研究を踏まえて著者は、新しい空間認識に基づく研究は、「記憶」や「アイデンティティ」の問題はもちろんのこと、異文化間の差異、研究上の「辺境」や社会の低階層の実態、そして空間の「生産」、あるいは「消費」の過程、およびそこに潜む意図を解明することに寄与すると強調する。

I

第1章「共同体を継承し、表顕すること——キュレネのアゴラ——」。本章では、北アフリカの都市キュレネに関して、都市の創成期から紀元4世紀まで、そのアゴラの空間的發展が分析される。古代の遺構が数多く残るキュレネであるが、先行研究では、個別の建築物に焦点が当てられるのみで、アゴラのような重要な公共空間全体の発展とキュレネの政治史とが結びつけられて考えられることはなかった。そこで本章では、キュレネにおけるアゴラの空間的發展、およびアゴラという空間と都市の政治史との相互作用が考察される。

前7世紀末、エーゲ海のテラ島の入植者たちによって建設されたとされるキュレネだが、

次第に定住が本格化し、バトス王によって統治されるようになるものの、政治的情勢は依然不安定であった。この時期、後にアゴラとなる個所に建築物が立ち並び始める。この時点のアゴラは、共同体の中心というよりは、共同体の境界に位置しているにすぎなかった。しかし、前6世紀初頭、バトス王の墓がアゴラ近くに建設されたため、その儀礼的重要性が増大した。

前6世紀後半、キュレネは、外部部族との対立、および内紛によって騒乱の時代へと突入する。結果として、王権の制限、市民の再編成などが行われ、政体に変化が生じた。この改革も結局成功せず、ついにキュレネはペルシア帝国支配下のエジプトに従属することとなった。この頃、アゴラは列柱廊の建設などにより拡大され、また次第にアゴラとしての輪郭が明確化されるようになったとされる。このような動きによって、バトス王の墓が徐々に注目されなくなっていった一方、アポロン神殿やブリュタネイオンがアゴラに付属された。以上の変化は、アゴラを都市の物質的、政治的、そして宗教的中心として表明しようとした結果であると著者は理解する。

前5世紀前半、キュレネは比較的平和な時代を迎える。アルケシラオス4世の活躍により、キュレネはキュレナイカ地方における権力の拡大に成功している。キュレネの繁栄はアゴラ、特にその西側の発展に影響を与えた。アテナイ民主政の影響を受けた儀礼の場所が廃棄され、都市の建国神話に関する建築物はアゴラの端に移設されてしまった。このようにアゴラは、都市政治の変わりゆく性質を反映すると同時に、次第に都市において重要な要素になっていったのである。

前4世紀後半、キュレネの歴史は再び大きな変化を見る。同市は、アレクサンドロス大王の手に落ち、前305年以後はエジプトのプトレマイオス1世の侵攻を受け、彼の息子マガスのもと金権政治が導入された。この時期、アゴラにおける既存の建築物は大きく改築・再編された。著者はこの時期の変化に、都市内部における民主政と寡頭政のせめぎ合いという政治的状況を読み取っている。

前3世紀から2世紀にかけて、キュレネは、プトレマイオス朝、続いてローマの支配下に入った。アゴラについては、その中央部分に大きな変化が起こった。かつて、廃棄された神殿が再導入されるとともに、その神殿は支配者と市民の協調を象徴するものとして読み替えられるようになったと著者は指摘する。アゴラ中央のモニュメントに関しても、支配者を称えるために建造されたと著者は述べており、支配者への意識とアゴラ中心部という空間との関係が強調される。他方、ゼウス神殿がアゴラに加えられたように、ギリシア的な要素をアゴラに組み込もうとする動きも同時にみられた。

前1世紀初め、ローマの元老院はキュレネに自由を与え、前74年には正式にローマの属州に加えた。特に、ティベリウス帝、およびクラウディウス帝期、キュレネのアゴラはローマの影響によって再編された。神君アウグストゥスや女神ローマの聖域がアゴラに設置されたものの、これによって都市の伝統が完全に損なわれることはなかった。ここには、新しい

建築物と過去への尊敬というローマのバランス感覚が反映されていると著者は強調する。

紀元2世紀初めに勃発したユダヤ人の反乱によって、キュレネのアゴラは損害を被るが、ハドリアヌス帝以降、皇帝の主導のもと都市の再建活動が実施された。再建に際して、アゴラのカエサル廟に焦点が当てられる一方で、ギリシア性を示唆する建物は次第に消失していった。3世紀半ば以降、相次ぐ地震やディオクレティアヌス帝による属州再編によって、キュレネの地位は大幅に低下した。アゴラも壊滅的な被害を受け、4世紀には多くの建物が私邸に取って代わられた。

結論において、著者は、アゴラという空間の発展がいかに同時期の都市における政治状況に左右されていたかを、改めて強調する。政治状況の影響を受けるにしても、アゴラはそれ単独で形成されるのではなく、都市内部における他の重要な空間との相互関係に基づいて創りだされていた。通時的には、キュレネのアゴラは、都市が平和を享受していれば、ほとんど手をつけられることはなく、逆に、政治的困難が生じたときほど変化を被っている。最後に、アゴラの機能的重要性に関して、経済的、宗教的、そして市民的中心地から、徐々に都市の記憶の場に変化していったことが指摘されている。

以上が本章の大まかな内容であるが、ここからは評者が感じたことをいくつか提示しよう。まずは、本章の対象であるキュレネに関して、その選択理由が十分に示されていないことである。古代世界においてキュレネはどのように位置づけられるのか、その位置づけは時代によって変遷しえたのか否か、ということは明らかにされていない。著者も述べているように、キュレネの政治史は都市内部で閉じた話ではなく、絶えず、外部勢力の影響にさらされていた。したがって、地中海世界、あるいは少なくともギリシア世界という文脈を考慮することなしには、キュレネの政治史とアゴラの空間的発展の関係が、キュレネ独自のものであるのか、あるいは地中海世界で広くみられるものなのかを評価することはできないだろう。この点については、本書が私たちに突きつける課題なのかもしれない。

もう一つは、本章の分析手法に関してである。キュレネの政治的流れとアゴラの空間的変遷を関連づけることが本章の手法であり、同時に独自性でもあると評者は理解している。しかしながら、アゴラという空間を「生産」する主体については、史料制約が厳しいのかもしれないが、ほとんど言及されていないため、都市の政治的变化とアゴラの発展の結びつきについては説得力に欠ける。もちろん、これは評者が歴史学の人間で、本章の主たる根拠である考古学資料の扱いに不慣れであることから感じることもかもしれない。しかし、たとえそうではあっても、考古学資料の年代決定要因など、より具体的な情報が記されていれば、専門を異にする読者も、著者の主張に関していっそうの説得性を認めることができるだろう。実際、キュレネほどの都市であれば、ある程度の碑文史料が発掘されているはずである。それゆえ、考古学資料のみならず、碑文などの文字史料を組み合わせる余地があったのではなかろうか。性質の異なる史資料をいかに有効的に組み合わせるかが、西洋古代史における空間研究の一つの課題であるように思われる。

(増永理考)

II

第2章「多神教のネットワーク——デロスにおける神々の空間——」は、古代ギリシア・ローマ世界において宗教的、商業的に重要であったデロスに焦点を絞り、前7世紀から前1世紀における、神々の空間的ネットワークについて論じたものである。以下では、本章の4つの時代区分に即して内容を概観した後、論評を加えることとする。

本章でまず論じられるのが、前700年から前500年における、アポロンとアルテミスの聖域の発展である。著者は、こうした中心的聖域が発展する状況下での、ゼウス、ヘラ、レト等の聖域の位置関係に注目し、これが神話を反映したものであること、および、空間形成に際して自然の景観が利用されていることを指摘する。

デロスがアテナイの支配下に置かれた前500年から前314年には、神々の関係もまたアテナイによって再編成されていくこととなる。特に、アテナイがアポロンを重視したことで、それまでの対等な関係性が崩れ、アルテミスに対するアポロンの優位という状況が形成される。これに対し、アテナイから独立した後の、前314年から前166年のデロスでは、こうしたアポロン優位からの脱却が図られ、アルテミスが再び重視されるようになる。また、この時期には多神教のネットワークが拡大し、ディオニュソス、アフロディテ、ポセイドンといった神々への関心が高まると同時に、多くの外国の神々が到来したとされる。

再びアテナイの支配下に置かれてからデロスが衰退するまでの、前166年から前69年の状況は、アテナイおよびコスモポリタニズムの影響を強く受けたものであった。この時期、アテナイによって神々のネットワークに様々な変化がもたらされたが、とりわけ中心的聖域では、アルテミス崇拝の衰退が確認される。一方、デロスが商業の中心として国際的な発展を遂げるに伴い、私的領域で崇拝される神々の数や、外国の神々への聖域の数が増加していく。また、いくつかのアゴラが設立されたのもこの時期にあたる。

このように、本章では、各時代の宗教的景観に目を向けることによって、デロスにおいて様々な空間的関係性が形成されていたことが示される。著者によれば、デロスの多神教のネットワークは、宗教的、社会的、政治的、経済的生活を反映し、構築し、これらと影響を与え合うものであったのである。

以上が本章の内容であるが、これらは、デロスの宗教的景観の歴史について、豊富な具体例を提示しつつ簡潔にまとめられたものであるという点では、非常に有益であるように思われる。ただし、本章の大部分は、各時代の具体的な空間的関係性を指摘することに費やされており、こうした「空間」に着目した分析の結果として、どのように従来とは異なる全体像を描き得るのかについては、十分に論じられていないように思われた。

また、本章冒頭で掲げられた目標と、実際の分析結果との対応関係についても疑問が残る。著者によれば、本章の目的は、神々の空間的関係性がどのように「構築され」、「認識され」、デロスのアイデンティティに「影響を与え」、逆に「影響を与えられたか」を理解する

ことである。ところが、本章の分析によって提示されているのは、どのように「構築され」「影響を与えられたか」に限られており、残りの半分については不明瞭なままである。この原因としては、史料制約に加えて、もう一つ大きな問題があると評者は考える。すなわち、空間を「認識」する主体として、著者が誰を想定して論じているのかが、明確に定まっていなかった。本章では、少なくとも、デロス人、訪問者、アテナイ人、ヘレニズム王朝の支配者といった人々が認識の主体として言及されているが、このことによって、考察の射程が曖昧なものとなっているように思われる。

以上のような問題点はあるものの、本章の個々の分析において、いくつかの興味深い事実が浮かび上がっているということ自体は看過されるべきではない。従って、今後は、本章の分析結果をより広い文脈に位置づける作業が必要となろう。評者は、さしあたり二つの方向性があると考え。第一に、デロス以外の事例との比較である。例えば、本章の分析をとおして、デロスにおける神々の位置関係について特定の傾向が確認されたことから、同様の考察を複数の地域に関して行うことで、デロスの特徴を明確化することが可能となると考えられる。第二に、商業的空間についてのより詳細な検討である。本章では、デロスの宗教的空間に対して直接影響を与えた事例にのみ目が向けられているものの、空間認識や空間が与える影響を総体としてとらえるためには、この二つの空間を切り離して考察をすすめることはできないであろう。こうした分析をとおして、空間的アプローチの成果としての新しい歴史像を提示することが、今後の課題であるように思われる。

(杉本陽奈子)

III

第3章「疎外の空間——ローマの道沿いの墓地——」では、オスティア、ポンペイ、そしてローマという3つの都市の墓地を取り上げ、その墓地景観の変遷を政治的・社会的文脈の中に位置づけて分析している。本章での分析を通じて著者は、人々が墓地景観を目にしてどのような感覚を抱いていたかを、特にアイデンティティと疎外感に注目しながら、明らかにすることを試みている。以下では、著者による分析を概観した後に、本章全体の評を述べたい。

オスティアは、ローマの外港として発展したイタリア中部西岸の海港都市である。この都市に関して、著者は、海に面するマリーナ門、東へ向かうラウレンティーナ門、そしてローマへ向かうローマナ門の3つの門から出て行く道路に面する墓地を分析対象とする。著者によると、マリーナ門付近の墓地は、オスティアにとって重要であった海に面しているという立地条件から、海に関係する名望家たちが葬られており、更には、他の墓域とは区別して重視されていたという。また、ラウレンティーナ門では、政務官や都市参事会員、騎士身分の者たちの墓と同等し得るものは発見されておらず、小商人や職人、解放奴隷の墓が支配的で

ある。反対に、ローマナ門付近の墓地には、富裕層や社会的に重要な人々の墓が多数残されている。しかし、紀元2世紀以降には、ローマナ門でも解放奴隷の墓が優勢となった。著者は、マリナ門とローマナ門がオステアの公的側面を示している一方で、ラウレンティーナ門は同市の日常的側面を示していると考えている。

ポンペイに関して、著者は5つの門を取り上げて、それぞれの門から出て行く道路沿いに形成された墓地景観について論じている。それによると、スタビア門付近では、サムニウム・ローマ的様式の埋葬が見られ、ポンペイのサムニウムの起源を想起させる。ノラ門では、外部からやってきた近衛隊兵士たちの墓や、都市ポンペイによって顕彰された名望家の墓、また、貧しい人々の墓も発見されており、この都市における社会の全体像を垣間見ることができる。ヴェスヴィア門付近では、女性のために、あるいは女性によって建てられた墓だけしか発見されておらず、それを見たポンペイの訪問者たちは、同市における女性の力強さを感じたであろう、とされる。ヌケリア門では、時代ごとに、政務官、解放奴隷、名望家の墓が建てられており、社会的・政治的変化の縮図が示されている。また、ヘルクラネウム門では、富裕な解放奴隷や権力者の墓についての詳細な記述がなされている。総じて、ポンペイを訪問する人々は、ポンペイに入るために通る門ごとに異なった印象を受けていたようである。

さて、本章の最後に分析されるローマ市については、墓地の残存状況が不規則なこともあり、門ごとにではなく、時代ごとにローマ市各地に残された墓地が分析されている。しかし、著者によって挙げられている墓地の事例をすべて紹介することは紙幅の関係上困難であるため、ここでは、紀元1世紀までの時代についてはエスキリヌス丘と道路沿い墓地に、アウグストゥス以降については皇帝の活動と墓地景観の変化に焦点をあてて紹介する。前1世紀までの時代では、エスキリヌス丘での埋葬活動が特記されている。この丘にはローマの有力者たちが数多く葬られており、その丘に立って眺めるという行為は「都市から物理的に隔絶されて、かつ、生者のではなく、死者の都市に特別に位置づけられることによって潜在的な疎外感を感じたであろうとされる。また、前3世紀から2世紀には、より貧しい者たちの墓がエスキリヌスに建てられるようになった一方で、富裕層や有力者の墓は、この時期に建設されたアッピア街道などの道路沿いに建てられるようになっていったとされる。そして、前1世紀にはエスキリヌス丘の墓地としての使用が制限されるようになり、別の地区に道路沿い墓地が形成されていった。アウグストゥス以降の時代については、皇帝が存在することによる墓地景観への政治的影響などが取り上げられている。例えば、アウグストゥスはマルスの野に葬られたが、ローマ市のエリートたちは、ローマ市において埋葬されて皇帝と競争することを避けて、ローマ市から離れているだけでなく諸都市からも離れた自らの所領に埋葬されるようになった。しかし、それでもガイウス・ケスティウスのピラミッドのように、ローマ市において手のかかった墓を作る者たちも残っていたとされる。

結論において、墓地景観がそれを見た者たちに与えたであろう感覚についての、著者の見

解が述べられる。著者によると、墓地景観はそれぞれ異なったアイデンティティを、墓地を見た者たちに印象付けていた。しかし、諸都市の墓地には潜在的な類似性があり、ローマ文化の同質性という感覚を、それらの都市を訪れる人々に与えていた。他方、墓地は恐怖と疎外感を与える空間でもあった。ローマ時代の人々にとって、墓地とは常に死を想起させる空間であり、彼らが訪れた共同体に自らが所属していないという疎外感を与える空間でもあったのである。

最後に、本章の評を述べたい。本章を読んでみて、評者が気がかりだったのは、研究史上における著者の問題の位置づけ、空間の研究における本章の意義、用語の意味についてである。本章では、著者によって提起された多様な問題を論じたことで、ローマの墓地研究にどのような見解を加えることができるのか、あるいはどのような見解が修正されるのかが示されていない。また、本章の墓地分析は、空間の研究というよりも景観の研究であるように見受けられた。ギリシア・ローマ時代の景観ではなく空間の研究の入門と銘打たれた本書における一つの章として、本章がいかなる役割を果たしているのかを示すこともできたのではないかと評者には思われる。更に、疎外 (alienation) とアイデンティティという語の意味が不明確な箇所が散見された。例えば、ローマ市のエスキリヌス丘に立った者が死を想起させる墓地景観から疎外感を感じただろうと述べる箇所では、一体、それがどのような疎外感であるのか、評者には想像することができなかった。また、アイデンティティとはいったい誰のアイデンティティであるのかは明記されておらず、文脈によって判断しなければならなかったことから、アイデンティティに関する著者の見解は曖昧なように見受けられた。

(山下孝輔)

IV

第4章「植民市－母市関係への空間的アプローチ——シュラクサイとコリントス——」において、著者は、前章までの特定の空間に対する考察から視点を変え、植民市－母市間という2つの異なる空間同士の関係性に着目することを試み、その代表例としてシュラクサイとコリントスを取り上げる。

著者はまず、前書きにおいて両者の関係性に関する研究史をまとめる中で、本書が、植民市が母市の鏡像にすぎないという古い画一的な一方向的解釈ではなく、異なる植民市－母市間に異なる関係性を認める M・フィンリーの立場⁵⁾を前提とすることを示す。そして本書の独自性を、徐々に関係性を構築する際に用いられた複雑な原動力に新たな方法を提供することであると述べる。具体的には、考古資料（物質文化や埋葬慣習）や碑文史料、文献史料等の様々な観点から、総合的に両者の関係が時代を経てどのように認識されてきたのかを検討し、その結果、その認識の変化がより広い地勢における両者の空間としての類似・相違の認識をどのように形作って行ったかを、アルカイック期、前5世紀、前4世紀、前3世紀以

降～紀元1世紀の4つの時代ごとに区切って考察する、という手法を取ることを表明する。

第1節で検討されるアルカイック期の両都市の関係は、複雑で解釈が難しく、またもっぱら考古資料、時に碑文史料に頼る以外にない。本書では、両都市の関係を、考古資料に基づいた都市の配置、建築・芸術・貿易、宗教的慣習と埋葬という様々な観点から多角的に検討する構成を採用する。これらの考古資料によれば、後の時代に記されたトゥキュディデスの記述とは違い、シュラクサイ建設当時には既にその土地は広い地域にわたる商業的中心地として機能し、多様な民族共同体であったことが看取される。また、建築様式、芸術様式においては母市を含むギリシア本土に対するシュラクサイの独自性が際立っている。一方で、シュラクサイはアルカイック期、古典期をとおして、オリュンピアやデルフォイにおいては強い存在感を保ち続けていた。これらが指し示すのは、植民市は母市の所有物であり、従属的な立場にあったという伝統的な見方とは矛盾し、逆にシュラクサイが母市との間の距離感を積極的に構築し、むしろ母市や他のギリシア都市と同等の序列に立つための自己主張を行った結果であり、母市とのはっきりした違いや文化的独立を示すものである、と結論づけられる。

一方、第2節で行われる前5世紀の両都市関係の考察には、物質資料、碑文史料とともに文献史料が用いられる。建築・芸術様式に関しては、母市よりも他都市、特にアテナイとの近似性が指摘される。それに加えて、この時期、アイスキュロス、ピンダロス等のギリシア本土で活躍した詩人、シュラクサイ出身の著名人のシュラクサイーアテナイ間での移動が顕著となる。同時期の多くの文献史料がシュラクサイに言及し、その母市との距離感やギリシア本土の都市、聖域との拡大する空間的関連性を示している。著者は、個々の文献史料に対して詳細な検討を加える中で、前6世紀前半においては、シュラクサイがアテナイとの空間的近似性を維持すると同時に、植民都市的つながりとは距離を置いて広くギリシア世界の一部と認識されたが、5世紀後半に入ると、その関係があからさまに対立的なものへと変化した、と結論づける。

第3節でも、前4世紀における両都市の関係が、物質資料、個別の文献史料の検討によって示される。まずディオニュシオス1世の台頭により、再びシュラクサイと他のギリシア都市との関係が密接になる一方で、母市コリントスとの関係は皆無であったとされる。続くディオニュシオス2世の台頭によって、一旦シュラクサイのギリシア本土との距離が広がったが、対カルタゴ戦を機に、カルタゴという外部の敵を前にして再びギリシア世界の一部と認識され、同時に母市コリントスとの空間的緊密さが見られるようになる。これは、シュラクサイで鑄造された新貨幣や戦勝奉納品からも明らかであると主張される。

第4節では、前3世紀からローマの支配下に置かれた時代に至るまで、当時のシュラクサイに対する同時代人の認識を、物質資料とともに文献史料の検討をとおして考察する。当時重視されたのは、母市やギリシア世界よりも、むしろローマやカルタゴとの関係であり、最終的に第二次ポエニ戦争でシュラクサイはローマの支配下に下った。ヒエロン2世の時代

以降、実際には完全に母市との関係は消滅していたにもかかわらず、シュラクサイは頻繁に作家たちによって「ギリシア的な存在」として取り上げられるテーマとなり、それらが「常に植民市－母市間には継続した軍事的、政治的交流が存在するとともに、物理的空間という意味においても強固に繋がっており、シュラクサイは常にギリシア世界の一部であることを願っていた」というある種の幻想的な物語として後世の認識を再編成してしまったのだと主張される。そして著者は、こうした歴史記述の傾向は、ローマの皇帝たちが自らの統治のために理想像として用いようとした「統一したギリシア」という概念をより強調すると同時に、東方の拮抗勢力に対抗するための政策を反映しているのではないかと推測する。

結論の節で著者は、植民市－母市間の関係を一方的従属関係に過ぎないとする過去の研究を再度否定した上で、植民市－母市間の関係は、複数のレベルで同時に作用する複雑かつ変化しつづける言説の一部であると述べ、特にローマ時代の文献史料によって再構築された植民市－母市間の過度に強調された親密性は、現実がそれとは全く異なった様相を示すようになっていたからこそ敢えて示されたものだったと主張する。

以下、評者の意見を述べる。全般的に言って、本章では、前8世紀から紀元後のローマ支配時代までの長期間におけるシュラクサイと母市との関係が、時代を追って丁寧に見直されることによって、両者の関係性が時代ごとにどのような変化を辿ったのかをおおまかに理解することができる点は評価できる。

一方で、K・ヴラソプーロス氏の書評⁶⁾にもあるように、この空間の関係性の視点が常に植民市シュラクサイの側からのものであり、逆の視点が十分に検討されていないという難が指摘できるだろう。もしも母市コリントスの側にも著者の考える両者の関係性を示す碑文史料や物質資料(例えばシュラクサイとの関係を敢えて友好的ものと示そうとしていることが看取できるものなど)が存在するのだとしたら、それを論考に加えることによって、より一層著者の説に厚みのある証明がなされることになるだろう。

また、都市というものを考察する際には常に問題となると思われるが、都市を一つの総体として捉えることの危険性も指摘できるだろう。どの時代のどの都市においても、一つの都市の中に様々な思惑を持った集団が重なり合って存在しているのが常で、そのうちのどの意思表示が史料として残ったかによって、認識される都市像は異なってくるであろう。

もう一つ難を指摘すると、アルカイック期のシチリアには既に多民族が存在していた状況や、植民市－母市間の関係性の考察に考古資料を用いる点については、それほど新規性が見出せないようにも思える。過去に既に我が国内でも当時のシチリアの多民族混交状況を説明する論文が存在しており⁷⁾、それらに記載されている内容以上に新規なことを指摘できているようには思えない。

しかし全体的に、評者としては面白く読むことができた。特に、同時代に記された多数の文献史料を考古資料と比較検討することによって、両者の指し示すもののズレから導き出される結論(特に為政者の政治的意図と作家の文書の傾向についての考察)は非常に興味深

く、的を射ているのではないかと思われる。欲を言えばもう少し両者の具体的な関係性を詳細に示す碑文史料も紹介してほしかったが、様々な史料を用いて多角的な視点から、二つの異なる空間の距離感を軸としてその関係性を再検討する、という当初の目的は成功していると言えるだろう。

(宮坂真依子)

V

ここまでとは打って変わって、テキストの空間と空間性のみに焦点が当てられるのが、第5章「ストラボン『地理誌』のオイクメネにおけるギリシアの位置」である。分析の対象となるのは、章題のとおり、ストラボンの『地理誌』である。著者によると、近年の『地理誌』に関する研究は、その叙述の枠組みや、ストラボンの描くオイクメネ（居住世界）各地域の分析など、様々な側面で目覚ましい発展を遂げてはいるものの、作中のギリシアの扱いについては研究が進展していないという。

ストラボンが描くギリシアは、ローマの支配に覆われ過去のものとなった場所と長らく考えられてきた。しかし、著者はストラボンが彼の生きた時代においてもギリシアを重要な空間として捉えていたと主張する。最大の根拠となるのは、過去の要素が、ストラボンが生きている「現在」でも良く知られているほどに重要であるならば、そうした要素は「現在」でもその土地の特徴となりうるとする記述。この点に鑑みると、オイクメネ各地やギリシアを記述する際に用いられるギリシアに関する要素、すなわち、ホメロスやギリシア神話、あるいはギリシア人が関与した歴史的要素は、単に「過去」として位置付けられるのみならず、「現在」においても、その土地の一部として、なおも重要な要素とみなすことができる。

また、ストラボンは『地理誌』の叙述をとおして、ギリシアに特権的な地位を付与する。例えば、彼はあえてヨーロッパの最後にギリシアを位置付けることで、『地理誌』全体の中心にギリシアを置く。こうした構成は、ギリシアを世界の中心に置くというギリシアの哲学・地理学的伝統の反映でもあるが、これによってギリシアはテキストの上で中心に位置づけられる。さらにストラボンは、ローマ支配下において変転するオイクメネの縮図として、またローマの将来を暗示するものとして、ギリシアを比喩的に用いているという。

このようにして著者は、ストラボンが、ギリシアをローマに匹敵するほどに重要な空間とみなしていると結論付け、彼がギリシアに与えた重要性について再評価を促すのである。

一方で著者は、ローマがストラボンの叙述に与えた影響にも注意を喚起する。上に挙げたようにギリシアは、テキストの上では中心を占めているが、一方で、ヨーロッパに関する叙述の最後に置かれる。また、ローマの支配下においてギリシアは収奪される存在である。このように、重要でありながら同時にローマ支配下において無力な存在であるという曖昧なギリシアの位置付けは、『地理誌』の叙述において維持され続けるのである。

本章はストラボンの叙述における新たな一面を描き出すことに成功しており、さらに、本書の検討の中で、分析の手順と先行研究に対する自身の立場が最も明確である。テキストに対し、空間的アプローチがいかにも有用か指摘するという、本書全体における本章の目的に照らしても、説得的な議論を提供していることは間違いない。

本章の分析から今後発展が期待できるのは、ストラボンと彼以外のギリシア人作家との比較であろう。ストラボンは、上に述べたように、オイクメネ各地を叙述する際にギリシアに関する要素を持ち出しており、また様々な事象を説明する際にも、ギリシアを比喩表現として用いている。著者はこうした用法をもってストラボンの叙述におけるギリシアの重要性を指摘しているが、果たしてそう素直に受け取ることができるのだろうか。評者がここで想定するのは、彼が使用するギリシア的要素は、ギリシア人作家たちの間で慣習的に用いられてきた語彙だったのではないか、ということである。ストラボンがギリシア的な伝統の中にいるならば、彼の思考や表現方法もそうした枠組みの中に拘束されているであろう。著者の言うギリシアに関する要素なるものが、作家たちにごく一般に用いられていたとするならば、著者が析出したストラボン叙述の性質は、ギリシアの歴史叙述、地理叙述の中で、いかに位置付けられるのだろうか。以上のことから、『地理誌』と、その他の歴史書、地理書との比較は、ストラボンの叙述を分析する上で有効な手段だと思われる。

(酒嶋恭平)

Conclusion

最終章「結論——ギリシア・ローマ世界における空間と社会——」では、まず各章の分析とそれぞれの本書における位置付けが確認された後、分析の成果が古典期からローマ時代までの広い時代的枠組みに置き直される。ここで指摘されるのは、一面的な理解では把握しきれない、古代人の空間に対する見方の多様性と複雑さである。さらに著者は、古典期からヘレニズム期にかけては最も継続性がみられ、ローマ時代においては最も敬意をもって扱われた空間として、宗教的空間の重要性を指摘する。宗教的空間は、ギリシア・ローマ世界をとおして、異なる文化に対する窓口としての機能を有しており、今後、研究の進展が望まれるという。

(酒嶋恭平)

総評

それでは、ここまでの各評から指摘できる、本書の全体的な問題点をまとめておこう。一つは主体の問題である。特に、著者が分析の過程で、しばしば「空間の認識」という問いの立て方をしていることが気になった。限られた史資料の中で認識を語ることは、ともすれば

実証性の欠如につながりかねない。また、分析結果の説得力にも疑問符がつけられる。さらに、個々の分析自体は興味深い事例を確認しているにもかかわらず、必ずしもそれを全体像に結び付けて提示はしていない。全体を意識した議論が期待される。

ただし、本書が入門書でありながら、従来あまり適用されてこなかった対象に、空間的な分析手法を用いたということを考慮するならば、こうした問題点に関して、我々自身も、その発展の可能性を含め、分析手法の妥当性を積極的に考えていくべきであろう。実際に、本書の分析結果からは、空間的アプローチの多方面にわたる可能性もみえてきた。それは以下の3つである。

まず言えるのは、空間という問題を設定しないと見逃してしまう細かな部分が明らかにされる、ということである。特に第2章では、公的空間と私的空間で支持される神々の違いや、個々の神域に対する扱いの違い、さらにその具体的な様相など、空間という問題を設定することによって初めて浮かび上がる興味深い事例が示されている。第1章、第3章でも第2章と同様に細部が検討されているが、それぞれ、空間という問題を設定することで、第1章では空間の機能の変化、第3章では異なる空間同士の発展の比較というように、多様な分析が可能であることが確認できよう。

また、2点目として、文献史料と考古資料に対し空間という視点からアプローチすることで、文献史料が貧弱でも、歴史を再構成することができる、ということが挙げられる。母市と植民市間の実際の空間に基づく関係と、作家たちにより文献の内部で構築された関係とを考察する第4章では、特に、シュラクサイの様々なネットワークが浮き彫りにされていた。この章では、史資料を、空間同士を比較することに用いることで、これまでとは異なる分析結果を提示することに成功している。さらに、第1章では、キュレネ内部の歴史を、空間的アプローチをとおして内側の視点から再構成している。

3点目に、こうしたアプローチは、特定の個人がある空間をどう認識していたか、という点を明らかにすることが挙げられる。例えば、第4章では、各作家たちの空間認識を明らかにしているし、また、第5章での分析では、ギリシアという空間に光を当てることで、ストラボンがギリシアをいかに捉えていたか、彼の考え方が示されている。特にこの章で著者は、具体的な分析過程を示して、異なるテキストに対しても、そうした手法が有効であると提示することに成功している。

このように、空間的アプローチからは、今後、分析のさらなる発展の可能性を引き出すことができる。そうした意味で、入門書という形態で比較的手軽にこうした成果の摂取を可能にした本書の意義は、わが国においても、高い価値があるように思われる。今後の古代史研究の発展を占うという意味でも、本書は有効であるだろう。ぜひ一読をお勧めしたい。

(増永理考 杉本陽奈子 山下孝輔 宮坂真依子 酒嶋恭平)

註

- 1) H・ルフェーヴル (斎藤日出治訳)『空間の生産』青木書店, 2000 年 (原著 H. Lefebvre, *La production de l'espace*, Paris, 1974)。
- 2) 例えば, P. J. Thonemann, *The Maeander Valley: A Historical Geography from Antiquity to Byzantium*, Cambridge, 2011; C. P. Dickenson and O. M. van Nijf (eds.), *Public Space in the Post-Classical City: Proceedings of a One Day Colloquium Held at Fransum, 23rd July 2007*, Leuven, 2013 が挙げられよう。
- 3) 著者情報については, <http://michaelscottweb.com/> を参照 (最終閲覧 2014 年 10 月 27 日)。
- 4) M. Scott, *Delphi and Olympia: The Spatial Politics of Panhellenism in the Archaic and Classical Periods*, Cambridge, 2010; id., *Delphi: A History of the Centre of the Ancient World*, Princeton, 2014.
- 5) M. I. Finley, *A History of Ancient Sicily to the Arab Conquest*. 2nd edn., London, 1979.
- 6) K. Vlassopoulos, 'Rezension von: Space and Society in the Greek and Roman Worlds', *sehepunkte* 13, Nr.7/8, 2013. (<http://www.sehepunkte.de/2013/07/22677.html> 最終閲覧 2014 年 10 月 27 日)
- 7) 桜井万里子「異形のギリシア世界——シチリア——」樺山紘一ほか編『岩波講座世界歴史 4』岩波書店, 1998 年, 85-112 頁。渡辺耕「シチリア西部における文化の混交——エリュモス人, フェニキア人, ギリシア人——」桜井万里子, 師尾晶子編『古代地中海世界のダイナミズム——空間・ネットワーク・文化の交錯——』山川出版社, 2010 年, 51-76 頁。同「ヘレニズム期シチリアにおける移民ポリスの文化的変容についての一考察——エンテッラの事例を中心に——」『西洋古典学研究』53, 2005 年, 68-79 頁など。後者 2 本の論文はどちらかというとシチリアの西北に位置するモテュア, エンテッラを中心に語られるが, 物質資料, 考古資料, 碑文史料等を多角的に検討するという手法は同様のよう感じられる。